初期日本バハイ信教の歴史

バーバラ・シムス

概要

この論文は、三人の女性バハイ教育者が日本へ及ぼした精神的影響に関する考察である。それは、アグネス・アレキサンダー、マーサ・ルート、キース・ランサム・ケーラーの三人で、すべて大業の翼成者である。

日本バハイ信教の初期発展段階である六、七十年前、アレキサンダー女史は日本に居住していた。また、その頃、ルート女史とランサム・ケーラー女史は何回か日本を訪問した。彼女らは、その教養を通して多くの日本人と接触することができた。特に社会の指導者層との接触が多かった。このように社会の上層からティーチングしていくことにより、彼女らは、多くの日本人と接触することができたのである。

たとえば、１９２０年、アレキサンダー女史は、日本を訪問中の中国人新聞編集者と出会い、彼女は、バハイ信教の「中心人物ら」に関する２５の記事を彼に提供した。それらは、「広東タイムス」に載せられ、中国中に広まり、数百万の人により読まれた。また、彼女は、日本の主要新聞でも多くの記事を載せることができ、また、英語あるいはエスペラント語で、広く講演を行った。彼女の提供した考えは、知識人の間に幅広く影響を及ぼした。ルート女史はラジオ放送で通訳を通して講演し、講演の原稿コピーを報道関係者や通訳者に提供した。今日、われわれは、現代の通信手段を用いても、彼女らがなした業績を繰り返せないでいる。

さて、この初期の活動により、現在の日本にどのような影響が及ぼされているか、問うてみる必要がある。アブドル・バハは、個人にあてた書簡の中で、しばしば、「種をまく」ことについて述べているが、アレキサンダー女史にあてられた書簡では、このことが四回、言及されている。この「種をまく」ということには、種が芽を出して成長し、実を結ぶという概念が内在している。三人の大業の翼成者らは、前述の手段を通して、種を広くまいたのである。

一見、過去のティーチング活動の結果はほとんど残っていないかのように見えるが、より広い視野で、現在の日本社会に眼を向けるべきである。バハイ信教の教えや原則に接することにより、幾千人もの知識人や指導者らが、神の顕示者から直接下された重要な概念について知ることができた。これらの概念は、将来、国の指導者らとなるべき者らの意識内において、今日の日本を造り上げるべく実を結んだのである。

この論文では、これらの三人の女性が、日本の近代化と発展の進路を決定する世代の多くのメンバーの思想を影響することにより、日本の運命を変えたことが命題として上げられている。初期のティーチングの影響はまだ終わっていないのであり、われわれは、しばしば引用されているがまだ実現していない、あのアブドル・バハの予言、「日本は燎原の火のごとく燃え立つであろう」という言葉を忘れてはならないのである。